（1）自主行動計画2030策定にあたって

自主行動計画2030は2026年5月に3R推進団体連絡会から公表しました。策定時には2024年度までの実績をもとに計画立案しましたが、この度2025年度実績が得られましたので、その結果も踏まえて5か年計画の内容について、数値目標設定にあたっての考え方などについて詳細にご紹介します。

これからの5か年に向けた取り組み方針

3R自主行動計画として、従前からのリデュース、リサイクルの数値目標に加えて、2021年度からは水平リサイクルであるボトルtoボトルの目標も掲げて活動してきました。今後もなお一層の3R推進活動を継続しますが、資源循環の本質である「石油由来樹脂の使用量削減」の考え方を主要指標として掲げ、これをメインターゲットとして、3R・資源循環を進めていく方針としました。それを実現するための具体的な目標としての位置づけで、従来からの「軽量化率」、「リサイクル率」、「ボトルtoボトル比率」の指標も引き続き設定し、資源循環を推進していきます。

新たな指標「新規石油由来樹脂削減率」

将来に向けた持続可能な資源循環を目指すにあたって、プラスチックの原料である石油資源の削減が最重要課題と認識しております。そのために石油由来樹脂削減の指標として、**（1）「新規石油由来樹脂削減率」**を定義し、目標設定しました。

この削減には、従来からの軽量化による樹脂削減（軽量化率）、原料としての再生材利用（リサイクル率、ボトルtoボトル比率）および現在は、まだごく僅かの利用ですがバイオマス材の利用（植物由来樹脂）を推進し、2004年度比で新規石油由来樹脂削減率65%を目指します。

目標のイメージはP3に図示しましたが、直近までの実績結果は以下図15になります。軽量化の効果および再生材（ボトルtoボトル）の効果で、2025年度までに57%と大幅な削減を達成していますが、さらに2030年度までになお一層の努力で65%の目標達成を業界一丸となって推進します。

上記の新規石油由来樹脂削減率を達成するための個別目標として、従来からの指標項目についても設定しています。

(1)新規石油由来樹脂削減率：65%
(2)軽量化率：2004年度比30%
(3)リサイクル率：85%以上の維持
(4)ボトルtoボトル比率：50%

リデュース［軽量化率］

自主行動計画2025では、指定PETボトル全体で25%（2004年度比）以上の軽量化目標に対して2025年度は28.3%と達成しました。一方で、この目標達成のための主要用途別の個別目標については、P4図3に示すように、対象容器17種のうち5種のみが目標を達成していますが、残りの品種は目標値に達していません。用途、容量によって軽量化が進めやすいボトルと、内容物によっては品質保持などの面から軽量化が難しい製品も存在しています。また、全体的に軽量化の限界に近づいていることから、個別指標は業界としては設定せず、全体の目標は30%を目指すこととします。

リサイクル［リサイクル率］

PETボトルは単一素材で透明であるため、他のプラスチック容器に比べてリサイクルしやすく、10年以上にわたりおよそ85%という高いリサイクル率を維持しています。一方、まだ可燃ごみや不燃ごみへの混入も多く、さらなる高い目標数値を掲げるのは難しい状況と思われますので、前期同様に引き続き85%以上を目指します。

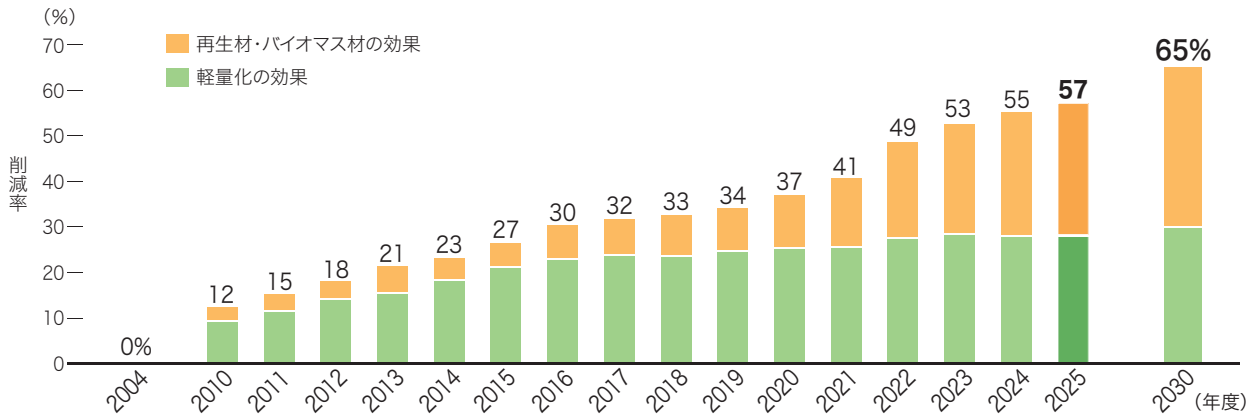
水平リサイクル［ボトルtoボトル比率］

2025年度は40.0%と順調に推移しています。2030年度までに50%を目指す目標を引き続き推進していきます。

有効利用率に関して

自主行動計画2025策定時に、2030年度までにPETボトルの100%有効利用率を目指すとしてきました（リサイクル＋熱回収）。2025年度の実績は99.0%という非常に高い有効利用率ですが、自治体の焼却炉での単純焼却（発電・熱利用無し）や海外のリサイクル工程での残渣処理の影響がある限りは、100%有効利用が難しく、今後は数値実績のみを公表します。

図15. 新規石油由来樹脂削減率



(2) 技術検討委員会の活動事例

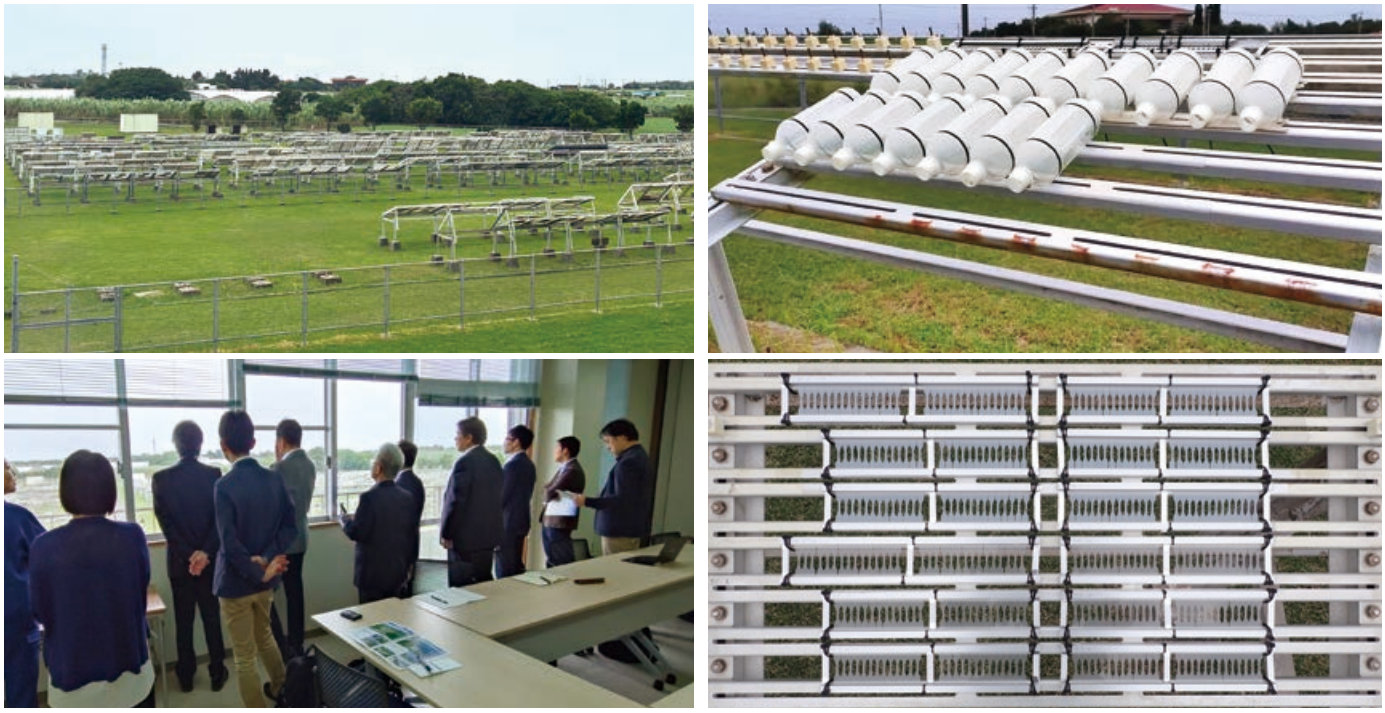
推進協議会の技術検討委員会では、毎年会員の飲料メーカーや再生樹脂製造事業者(リサイクラー)の工場を訪問し、見学を兼ね委員会を開催しています。2025年度は、11月27日から28日にかけて、沖縄県のフェイス沖縄株式会社(リサイクラー)、海洋プラスチックごみ問題でPETボトルの耐候性試験を依頼している一般財団法人日本ウエザリングテストセンターを訪問しました。

日本ウエザリングテストセンターは、国際規格(ISO/IEC17025)に適合した品質の大気暴露試験を行える国内唯一の第三者試験機関です。工業材料や製品の質的向上と産業の発展を目的としています。

大気暴露試験は、国内4か所の試験場(銚子、宮古島など)で、屋外環境による材料の経時変化を調査します。その他、促進劣化試験や物性測定・研究なども行っています。

今回は、沖縄県宮古島の大気暴露試験場を見学しました。宮古島暴露試験場での大気暴露試験は、2020年11月からPETボトル60本とPETボトルから切り出した試験片160本で試験を開始し5年が経過しました。暴露試験の結果は、前報告書などで紹介している通り、表面上に微細なクラックは発生するものの、ボトルや試験片が崩壊するような大きな劣化は見られないことを報告しています。

これらの検討は、金沢大学の比江嶋教授とマテリアルライフ学会の有識者の方々との取り組みとして学会などでも発表しています。PETボトルの大気暴露試験は、2030年まで10年間継続する予定です。



日本ウエザリングテストセンター宮古島暴露試験場の様子(写真右上:PETボトル、写真右下:試験片)

ステークホルダーからのご意見



金沢大学 理工研究域
フロンティア工学系 教授
比江嶋 祐介 氏

我々は屋外暴露試験を施したPETボトルの劣化状態をさまざまな分析手法を用いて研究しています。5年ほど屋外暴露した後でもPETボトルの見た目には大きな変化がなく、また十分な強度を保っていることから、非常に安定な材料であると考えられます。顕微鏡で観察すると、暴露時間1年ほどから、表面に数十マイクロメートル程度の非常に小さなクラックが生成しており、表面では徐々に劣化が進んでいることが分かりました。しかしながら、共焦点ラマン顕微鏡を用いて、厚さ方向の化学組成を分析したところ、表面から約20マイクロメートルまでの非常に浅い領域のみで結晶化が進んでいることが分かりました。高分子材料の劣化では、分子鎖の切断により結晶化が進む「化学結晶化」と呼ばれる現象がしばしば観察されますが、PETの表面でも同様の現象が進行したと考えられます。一方、数十マイクロメートルよりも深い内部では、暴露試験前とほとんど同じ状態を維持しており、PETボトルの劣化は最表面のみで局所的に進行しており、内部が健全状態を保っているために、崩壊しないことが分かりました。河川敷などに放置されたPETボトルは景観上大きな問題ですが、マイクロプラスチックの主要な発生源となる可能性は低いと考えられます。

(3) 情報発信・普及啓発に向けての多様な取り組みを推進

「PETボトルリサイクル年次報告書2025」記者説明会の開催

「PETボトルリサイクル年次報告書2025」の発行に合わせて、経団連会館（東京都千代田区）において、記者説明会を開催しました。20社24名のメディア関係者が出席して、2024年度の活動報告、ボトルtoボトルの今後の見通し、海洋プラスチックごみ問題の取り組み、使用済みPETボトル輸出状況などの説明を行いました。



「PETボトルリサイクル年次報告書」の記者説明会（2025年11月19日）

東京都中央区「子どもとためす環境まつり」への参加

昨年度に引続き、中央区環境保全ネットワークが主催する「子どもとためす環境まつり」が、中央区立中央小学校で開催されて、当日は約500名の来場者がありました。PETボトルリサイクルに関するクイズを通して、PETボトルのリサイクル率の高さなどに大きな関心を持っていただきました。また、当協議会の活動に対する重要性を小中学生、保護者、教育関係者などの皆さまにご理解いただけたと感じています。



中央区「子どもとためす環境まつり」の模様（2025年10月25日）

広報誌「RING」の発行

2025年度広報誌「RING」を継続して発行しました。2026年6月発行のVol.44では、「PETボトルリサイクルの環境教育」の代表事例として小中学校の取り組みをはじめ、郡山市・宝塚市のリサイクル活動の取り組み、さらには、再商品化事業者紹介に関して、株式会社サーキュラーペットの再生PET樹脂全量の「ボトルtoボトル」を目指すための再商品化事業の取り組みなどを紹介しました。



「RING」Vol.44

(4) 3R推進団体連絡会との連携

自主行動計画フォローアップ報告・記者説明会

3R推進団体連絡会（容器包装8素材で構成）は、容器包装3Rのための自主行動計画（2021～2025年度）の進捗状況について、2025年12月19日に経団連会館においてフォローアップ報告を行いました。

第20回容器包装3R推進フォーラム

「容器包装3R推進フォーラム」は、自治体・市民・事業者などのさまざまな主体が連携して容器包装3Rを推進する場づくりを目的として2006年から開催しています。2025年度は会場およびオンラインでの参加に加えて、後日の録画配信と多数の方に出席いただきました。



フォーラムの様子

国立環境研究所の田崎智宏室長に基調講演をお願いし、経済産業省、環境省、ならびに農林水産省の担当部署からのお話を伺うとともに、アサヒグループジャパン株式会社、新宿区、北海道大学の博士課程の学生さんから事例報告をいただきました。

容器包装3R交流セミナー

市民、NPO団体、国、都道府県、市町村の行政機関、事業者など多様なステークホルダーが一堂に会して議論をする場として、「容器包装交流セミナー」を定期的に開催しています。2025年度は、大津市（7月）、山口市（10月）、千葉市（3月）にて、貴重な意見交換を行うことができました。



交流セミナーの様子